

# 鯨 研 通 信

第368号

1987年6月

財団法人 日本鯨類協会 鯨類研究所 〒136 東京都江東区大島3丁目32番11号

電話 03 (683) 3621 (代表)



## 北大水産学部保存されていた 若干の捕鯨用器具について\*

北海道大学水産学部 河村章人

昨年(昭和61年)の7月頃、北大水産学部漁場学講座に若干の捕鯨用物品が長らく保存されているのがみつけた。一見して、かつてノルウェー式捕鯨が本邦に導入される前の捕鯨用小火器であることが判ったが、その後の多忙にまぎれて調べてみることもなく、とりあえず本学部付属水産資料館に保管してきたものである。このたび、ゆくゆくは同資料館の展示に供するため少々の錆落しを施し、改めてそれらを眺め回してみたので、どのようなものであったかを書きとめておくことにした。

なに故にこのような物品が本学部存在することになったのかは今もって判然としていない。

まず当該漁場学講座の上野元一元教授に照会してみたが、一切は不明とのこと。ただ同氏によれば、小樽の博覧会(小樽海港博覧会)の折にでも何らかの理由があって、北海道帝国大学農学部附属水産専門部へ資料として流れて来たものであるかもしれないとのことであった。

また、東峰重政氏(函館高水、昭和14年卒、元日本水産監督砲手)に照会してみたが、この物品については御存知なかった。その後、物品中の小銃には“ねー151-1”なる備品番号があり、これについて遡ったところ、昭和10年4月1日、北大農学部附属水産専門部から同年設立された函館高等水産学校に移管されたこと、及び年月は分らないが小銃については54円35銭にて2丁の購入がなされているということがわかった。ただし、現存するのはその中の一丁である。ともあれ今のところは何時、何処から購入したものかは全く判っていない。

このことは何れ判明する機会もあるかもしれないが、ここでは一旦おくとして、出て来た物品をとりあえず紹介しておくものである。即ち、目下本学部で保

管中の捕鯨器具は以下の計28点である。

- |                           |     |
|---------------------------|-----|
| 1) 捕鯨用小銃(ポンプ・ガン)          | 1丁  |
| 2) 手投げ用鉛先付発射装置(ダーティング・ガン) | 1丁  |
| 3) 破裂矢(火箭-ポンプランス)         | 計9本 |
| 3-1 小銃用                   | 5本  |
| 3-2 ダーティングガン用             | 4本  |
| 3-3 同上(3-2)用薬莢            | 2個  |
| 4) 手投げ銃(ハーブーン)            | 2本  |
| 5) 解剖具(カッタィング・スベード)       | 4本  |
| 6) エアー・ランス                | 1本  |
| 7) 解剖刀                    | 1本  |
| 8) 用途不明金具                 | 3個  |
| 9) 4)~6)用(?)木製柄           | 4本  |

以上のうち興味のあるのは往時の花形漁具であった小銃、ダーティング・ガン及びポンプランスであろう。表1で示したように、ポンプランス(破裂矢/火箭)の胴部径はいずれも22.3mmで、胴部本体の長さも全く同じであるから小銃とダーティング・ガンの共用かとも思われたが、よくみると矢先の長さが105.5mmと103.0mmで僅かながらちがっている。後端は前者がショルダー・ガンによる射撃用であるから矢尻部に3条の矢羽根(発射後に原形復帰のよいゴム製といわれる)がつくわけで、この部分は両者で異っている。このポンプランスは分解してみたところ、矢先の内部には分銅がついていて、矢の爆発用雷管につながる導火線が矢身を貫いて走っているのがわかる。この構造は矢代(1983, p. 29)の示すところの平戸植松組使用の火矢とそっくりである。しかしその火矢の大略は径27mm, 900g, 53.4cmの要目であり、ここで示すものよりもかなり大型である。

表1. 捕鯨具各品の要目。(長さはミリメートル、重さはキログラム)

| 品 名            | 全 長   | 矢先/刃長 | 銃 身 長 | 口 径     | 銃身/銃柄径 |       | 胴部径    | 重 量   | 材 質  | 備 考                      |
|----------------|-------|-------|-------|---------|--------|-------|--------|-------|------|--------------------------|
|                |       |       |       |         | 先 端    | 付 根   |        |       |      |                          |
| 小 銃            | 922   |       | 494*  | 22.24   | 28.85  | 36.70 |        | 7.9   | 真鉄・鉄 | 撃鉄はダブルアクション<br>*薬室から先端まで |
| ダーティング・ガン      | 455   |       | 330*  | 22.24   | 26.1   | 35.0  |        | 2.3** | 真鉄・鉄 | *同上 **銃付重量               |
| 同 上 付 属 銃      | 792   |       |       |         | 9.4    | 13.85 |        |       | 鉄    |                          |
| 同 上 薬 莢        | 48.8  |       |       |         |        |       | 23.85* | 0.038 | 真 鉄  | *発射によってふくれている可能性あり       |
| ポンプランス(破裂矢/火銃) |       |       |       |         |        |       |        |       |      |                          |
| 小 銃 用          | 474   | 105.5 |       |         |        |       | 22.3   | 0.500 | 真 鉄  | 後端はフェルト、矢羽根はない           |
| ダーティング・ガン用     | 365   | 103.0 |       |         |        |       | 22.3   | 0.450 | ”    | 後端はフェルト                  |
| ラ ン ス -1       | 1,820 | 152   |       |         | 17     | 59    |        | 4.7   | 鉄    |                          |
| ” -2           | 1,820 | 185   |       |         | 12     | 40    |        | 2.2   | ”    |                          |
| カッティング スベード -1 | 550   | 123   |       |         | 16     | 60    |        | 1.5   | ”    |                          |
| ” -2           | 440   | 113   |       |         | 12     | 40    |        | 1.1   | ”    |                          |
| ” -3           | 378   | 121   |       |         | 35     | 43    |        | 1.2   | ”    |                          |
| ” -4           | 436   | 188   |       |         | 20     | 47    |        | 2.6   | ”    |                          |
| エアランス          | 1,512 | 155   |       |         | 33     | 52    |        | 5.1   | ”    | 亜鉛メッキ                    |
| 解 剖 刀          | 2,150 | 480   |       |         |        |       |        | 1.8   | ”    |                          |
| 漏斗型金具          | 221   |       |       | 204/97* |        |       |        |       |      | *上、下端径                   |

さて、小銃。筆者は一見して小山良昌氏の小論を思い出した。即ち、山口藩北海道支配地が函館のブラキストンの仲介で買ったという火銃銃の図(小山、1985、p. 30及び小山、1986、p. 5)である。この図はいささかあやふやな線画であるが、見るとフロント・ロックのマスケット銃が変型したような姿のものでこれとは明らかに異っている。山口藩の北海道(苫前)における洋式捕鯨は明治4、5年の話であるから銃の型式としてはかなり古くさいものであろう。次いで矢代嘉

次いで矢代嘉春氏の記載したところの関沢明清が使用したものを思い浮べた(山代、1983、p. 57)が、あたってみるとこれともいささか型式は異っている。関沢明清使用とされるものはウィンチェスター銃式の引き下し式金具があり、これが撃鉄を起す作動方式のものなのか中折元込式とするための作動金具なのか判らない。これは明らかにニューベドフォードのウィリアム・ルイス社の発売になるポンプ・ガンそのものであるらしい。ともあれ、関沢明清が積極的に捕鯨にのり出すのは明治20年以降、米國式導入が明治27年(ちなみにもルウェー式は明治32年)なので、その明清使用のものというからこのような型式の銃は明治20~30年代頃のものであろう。山口藩北海道支配地が購入したものよりはかなり洗練されている。

また、矢代(前掲書)にはこれとは別の一丁が図示されているが、あやふやな図ながらもこれともどうやら一致しない。平戸植松捕鯨組においても明治5年、橋重彦による銃殺捕鯨へのきざしがある(矢代、

1976、p. 25)が、これも前の山口藩のはなしとはほぼ同一時代で、多分、銃の型式は当時外國製に倣うのが普通であったから同じようなものであったろうし、矢代(1976、p. 26、29)に示された植松組使用の捕鯨銃を写真と図でみる限り、これはScammon(1874、Pl. XXIV)と一致するものようで、明らかに異った型式のものである。このことは先にのべた火銃のサイズが本稿に示すものとは全く異っていることから容易に違いが想起できる。

明治16年の第1回水産博覧会では出品捕鯨漁具18点中5点到に授賞があるが、銃火器らしいものは入賞がないようなので出品されなかったのであろう。しかし、同審査報告では加賀能登越中海での捕鯨に玉目百奴の銃を製し云々、とあるがこれは余程怪しげなものだったとみえて、命中しても鯨は獲れなかったというからおよそここでの比較にはならない代物だったにちがいない。

第4回内國勲業博覧会(明治28年)では、長崎県松浦郡平戸の副島清三郎による捕鯨銃、火銃、魚孫の出品があり、同審査報告に銃が図示されている。米國製に倣って日本人向けに軽量化を施したものだが、これは明らかに植松組使用のものと同じか、極めて類似したフロントロックのマスケット銃型の流れをくむものである。しかし、同銃に使用の火銃の全体像は本稿に示した火銃とかなりよく類似していることは前述した通りである。ひとつ気になるのは、矢代(1976、p. 25)にある植松組使用のポンプランス(全長70cm)は

姿、形は前記の小銃用火箭とは全く異っている点である。本稿で示している火筒は小銃用、ダーティング・ガン用共に極めて類似した同一型式のものである。多分、後者はすでにある程度の量産形にまで改良された結果であるのかもしれない。

副島清三郎は第五回国術業博覧会にも出品している。捕鯨銃は軽量化して貫 106 匁 (約 8 kg、これは本稿小銃とはほぼ同重量である)、火箭は本稿に示した如き矢筈、矢羽根付胴管、矢尻の三部からなる。多分、その後にも米国製品を一心に模し、改良したものではないだろうか。残念ながら同審査報告には附図がないので具体的にはどんなものであったか判然としない。

前述の副島清三郎は第 2 回水産博覧会にも銃火器類を出品しているが、ここで同審査報告 (明治 32 年) に躍り出て来るのは東京府宮田栄助出品の捕鯨用銃砲とポンプランスである。矢代 (1976, p. 63) によれば、宮田栄助が初めて捕鯨用銃砲を商品として売り出したという。ともあれ、同氏は進歩三等賞を授賞である。そして同審査報告附図第 90 版に示された捕鯨用小銃、これは正しく今回出て来た小銃と姿、形を一にするも

のである。さて、若し両者が同じものであるとするならばどんな説明になるのか。審査報告から一部 (p. 59) を引用しよう。

『小銃ハ鋼製筒形ニシテ後部ニ螺旋ヲ装シ之ヲ火門ノ部分ニ螺定ス銃床ハ胡桃材ヲ用フ矢ハ銃製円筒形ニシテ三角錐形ノ鉄鍔ヲ付シ矢羽ハ護膜製トス矢身ニ爆發薬ヲ装シ火門ノ内部ニ導火線ヲ固定スルコト前記ノモノト同シ此小銃ニハ破裂矢及銃ヲ銃口ヨリ挿入シ雙手ニテ把持シ之レヲ發射スルモノナリ (第 90 版参看) 其他ボムプランス及銃ハ其製作特ニ斬新ナル點ヲ見スト雖トモ双發中砲及小銃ノ如キハ砲ヲ欧米ノ製法ニ取り漸ク意匠ヲ加ヘタルモノナリ全人ハ多年銃製製作ニ従事シ近年更ニ捕鯨銃ヲ創製セリ今回出陳セル所ノモノ概シテ考案製作共ニ良好ナリ他日遠洋捕鯨法ノ發達スルニ伴ヒ是等銃砲ノ需用漸ク多キヲ加フルニ至テハ斯業ヲ裨益スルコト蓋シ渺ナカラスト』

この記述によれば、銃床は胡桃材を使うようになっていたが、図示されたものは銃床に三角型の空洞部分があり、実物は真鍮製である。これまで、多分捕鯨各地であれこれ模倣、試作されて来た捕鯨銃も宮田氏の銃の出現に至って、これはかなりいけるとの判断が示され

\* ショルダー・ガン (小銃) とポンプランスなどは捕鯨史に必ず登場する捕鯨用銃火器である。これら火器の呼称には時々混乱を起しそうになるので、ここで今一度はっきりさせておきたい。“Bomb lance” は 1850 年代に発明された火薬内装式の破裂矢である。Ashley (1938) によれば、最初の実用に耐える bomb-lance は 1852 年、コネチカットの C.C.Brand の手になるが、その数年後にはニューベドフォードの E. Pierce が更に改良を加え一般化されたという。しかし、Tønnessen and Johnsen (1982, p. 18) によると、いわゆる ‘bomb-lances’ という語の解釈はかなり広く、どうやら薬莖を使用するものは殆ど全部がこれに当るらしいことをのべている。これを銃で射出するときの銃自体はポンプ・ガン或いはポンプランス・ガン (Scammon, 1874) で、矢代 (1976) のいうボスガン、手投げ銃 (ハンドハーブ) に装着発射するのがダーティング・ガンとなる。Whipple (1979, p. 20) ではこの手投げ銃の射出装置に対して文字通り ‘darting gun’ を呼称しているが、矢代 (1983, p. 53) はこのものの全体についてもポンプランスというが如き表現をとっているからややこしくなってしまった。しかし、ニューベドフォードのウィリアム・ルイス社発売になる本器の広告 (Bockstoce, 1986, p. 67) を見る限り、ポンプランスは正に上記の通り、破裂矢 (火箭)

そのものである。結局、発射装置としての小火器をめぐってはショルダー・ガン (ポンプ・ガン) とダーティング・ガンの 2 通りがあって、それに使う破裂矢がポンプランスである。ちなみにダーティング・ガンの基本はアラスカエスキモーの開発になるが、本格的に製作したのは 1865 年にニューベドフォードの Ebenezer Pierce 船長 (Ashley, 1938 p. 87—88 によれば Patrick Cunningham も加わっている) が開発し、ゼームス・アレン号の太平洋捕鯨に使ったものである (Bock stoce, 1986, p. 64)。その後、これは “Pierce’s bomb-lance” ともよばれたようである (Scammon, 1874, p. 218)。とはいえ、bomb-lance は元々氷海での鯨猟に有効な道具であり、Ashley (1938) によれば暖海のマッコウ漁では破裂矢の費用節約もさることながら、マッコウの群れを爆撃音で散らせてしまうので、その使用はかなり限られていた様子である。この意味からか、使用に際しては小銃よりもダーティングガンの方がよりよく利用された。また、Scammon (1874 p. 225) はホエール・ボートの装備が 48 品目、82 個からなることをのべているが、この中で “to which may be added a bomb-gun and four bomb-lances” としてこれに対して消極的ともとれる表現をしている。

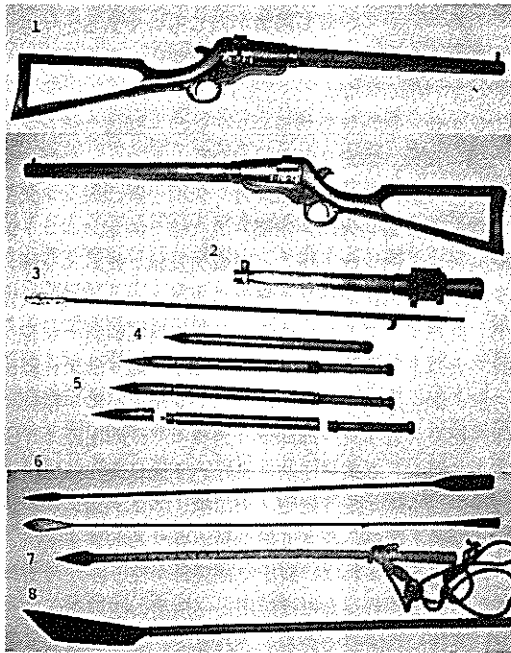


図1 見つけ出された捕鯨具。①ポンプガン（小銃）  
②ダーティングガンの銃身と発射装置 ③②にとりつける銚矢（魚簾） ④ダーティングガン用ポンプランス ⑤小銃用ポンプランス ⑥ランス2種（極めて繊細な造りなので、多分とどめ用のもの） ⑦エアランス（ロープはマニラ麻） ⑧解剖刀

ている。考えてみれば、このようにならかなり完成度が高く、商品化、そして多分ある程度量産化されたが故に偶々どこかの過程で北大にもまぎれ込むことになり、今に至ったことなのであろう。また、宮田氏の出品物に2種類の小銃用ポンプランスが図示されていて、その一種は矢先の断面からして本稿に示すものとこれまた一致するものようである。残念ながらダーティングガンについてはポンプランスも射出装置も全くふれておらず、図示されてもいないので確認はできない。しかし、Scammon (1874, p p. 227—228) の“Pierce's Harpoon-Bomb-Lance-Gun”をめぐる記載を参照したところ、殆どそれと違わない製品であることがわかった。手元にある小銃とダーティングガンの銃身の造りなどは全く同一製作者によると思われぬ形と金属色を呈しており、またポンプランスの材料、構造、口径サイズなどの一致はまず宮田氏製作になるものとみておいてよいのだろう。

エアランス、ハーブーン類についてはとり立ててのべることもなさそう。ただ、ハーブーンにせよエ

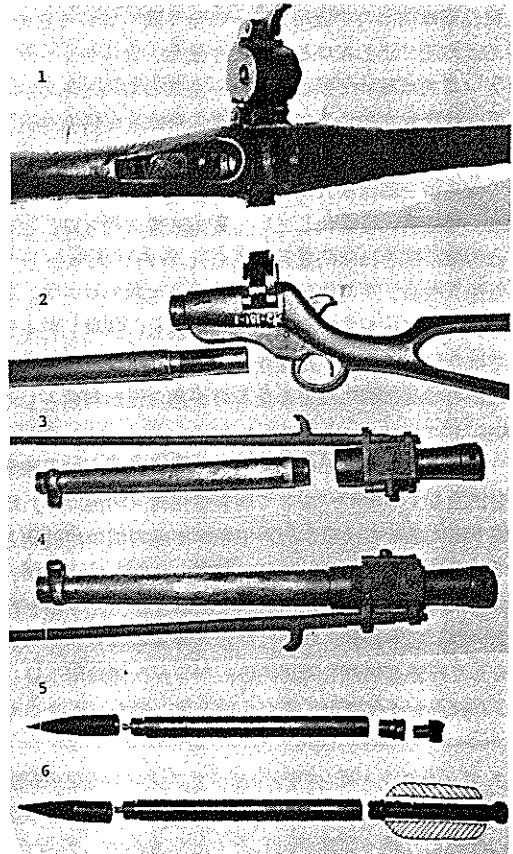


図2 拡大図。①ポンプガンの薬室部と撃鉄を示す ②ねじ込み式銃身を示す ③②と同じ構造をもつダーティングガン。ランスを装着してあるが、反対側に付す引金用の鉄棒 (iron-pole) を欠く。④薬室部の反対側。厚い皮革製の蓋がビス2本でとめてあり、開閉できるようになっている。この四角い部分の中に撃鉄がある。⑤三つの部分からなるポンプランス。ダーティングガン用 ⑥小銃用。図は矢羽根を想定。

エアランスにせよ、一見したところの直感はいずれも明らかに実際の操業に使われていたものであるらしいことである。銚（矢）先の磨耗、鈍化や歪み、Cutting Spade (boat-spadeとも単に spadeともよばれる) 類は刃の磨耗、刃こぼれ、そして多分血潮による強烈な錆、エアランスに結びつけられたロープのいかにも捕鯨現場のものらしい風情等々である。しかし、小銃使用の捕鯨法とエアランスの使用は同時にあり得たことなのだろうか。エアランスは少なくともここで調べた第1回、第2回の水産博覧会、第4回、第5回内閣勸業博覧会には顔を出していない。再

び小山氏（前掲）の小論に立ちかえれば、北海道増毛郡における山口藩北海道支配地の捕鯨ではスコルフ型 56トン（20馬力）の「増萌丸」による蒸気船捕鯨を目指している。明治4、5年である。つまり、これだと圧搾空気は船上に充分用意できるはずである。また、宮田栄助の銃は明治30年の出品だから、それに先立つ数年前にはすでに完成の域にあって実際に使用され続けていたことであろう。

北海道函館帝国水産会社による天塩国苫前での捕鯨は、スカーナー第一千島丸ほか2隻を使って明治22年に捕鯨が始まっていて、ザトウ、コク、ゴンドウを外国猟具を使って捕獲している（第2回水産博覧会審査報告、1899、p. 76）。これは北海道捕鯨に進出していた加賀藩齋藤知一が大日本帝国水産会社の傘下に入るの時期を一にしている。これにより前の齋藤知一の捕鯨は、矢代（1983、p. 114）によれば「まことに怪しげな鯨追込切腹誘導柵とか、砂苞ぶら下げ法とかいう奇法」であったのでハイカラな銃砲などは使っていなかったことであろう。ところが、翌明治23年になって急に大漁をしている。会社組織の捕鯨中心にあってここで銃火器を使ったのではなかろうか。

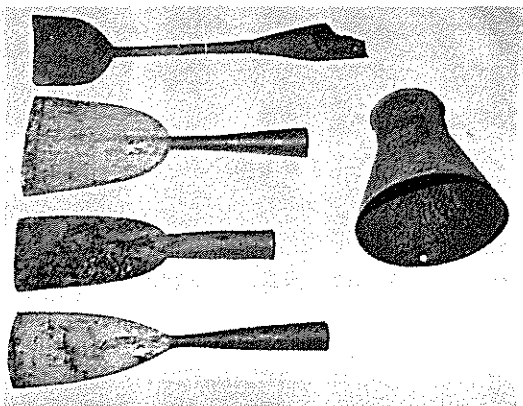


図3. 解剖具。カッティングスベード（ポート・スベード）。右の漏斗型金具は用途不明。

少々飛躍がすぎるかもしれないが、ここらのところをあれこれと考え合せてみると、明治30年の水産博出品にかかる本器が北海道帝国大学農学部附属水産専門部に流れて来たのはそれ以降、多分かなり後日のことにちがいない。ともあれ、こここのところの詮索は後日の検討を待つことにしたい。ここではとりあえず前記捕鯨用具が巡り巡って北大水産学部の水産資料館に存在していることをまず明らかにしておくものである。

本稿については鯨類研究所大村秀雄所長から種々貴重な御教示を頂いた。深く感謝を申し上げたい。とは

いえ、物事の歴史には常にくめども尽きぬ深さがあり、はなしの道中に思わぬ陥穽が潜んでいるのも常である。その意味で、本稿はどこかでとんでもない誤りを侵しているかもしれない惧れもある。若しそうであればすぐにも正し、修正しなければならぬ。読者諸賢からの御指摘、御教示を待ちたい。

× × × ×

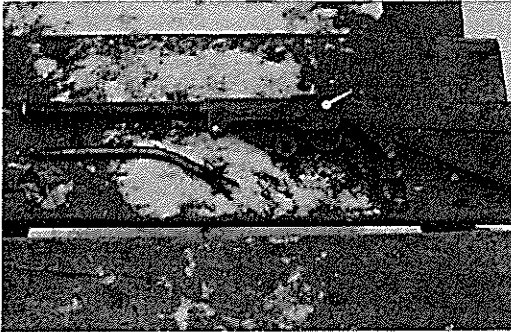
余録。この捕鯨銃を一見したとき筆者の脳裡をかすめたのは、何年前かに米国、アラスカ州、バロー村を訪れた際、当地捕鯨組のエスキモー人の家で見かけた小銃のことであった。今回、それを想い出して当時の写真を取り出してみたが、撮っていた小銃は明らかに本稿で云うものとは異なる中折式元込銃であった。本稿とは直接関係をもつものではないが、折角の機会でもあるので今後の何かの参考のため同銃とダーティンガンなど若干の写真を付して参考に供したい。なお、この小銃とダーティンガンは当時ポイントバロー沖のボウヘッド捕鯨で実際に使用されていたものである。元込式の為かポンプランスの矢羽根は矢尻から後方に突き出るような造りになっていて宮田式或いは本稿に示したものとは大分異っているのがみとれる。

#### 引用文献

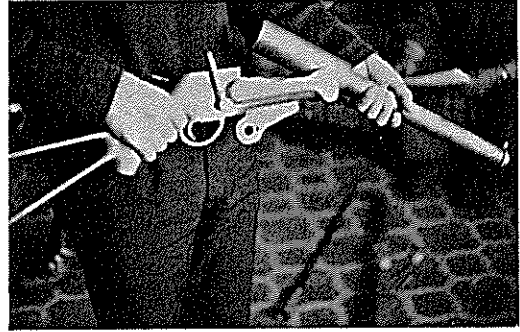
- Ashley, C., 1938. *The Yankee Whaler*. George Routledge & Sons, London.
- Bockstoce, J. R., 1986. *Whales, Ice & Men. The history of whaling in the western arctic*. Univ. Wash. Press, Seattle & London, 400p.
- 第4回内国勸業博覧会審査報告、1896。竜雲社、東京、569p.
- 第5回内国勸業博覧会審査報告、1903。金港堂、東京、516p.
- 水産博覧会第1区第1類出品品審査報告、1885。農務局、東京、pp. 205—218.
- 第2回水産博覧会審査報告、1899。第一巻第2冊、農商務省水産局、東京、219p.
- Scammon, C. M., 1874. *The Marine Mammals of The Northwestern Coast of North America*. Dover Publications, N. Y. 1968 Ed., 319p.
- Tønnessen, J. N., A. O. Johnsen, 1982. *The History of Modern Whaling*. C. Hurst & Co., London & Australian National Univ. Press, Canberra, 798p.
- Whipple, A. B. C., 1979. *The Whalers. Time-Life Books*, Alexandria, Virginia, 176p.

小山良昌、1985. わが国最初の洋式捕鯨の導入—山口藩北海道支配地における捕鯨漁頭末. 山口県地方誌研究, 54号、25—34.  
小山良昌、1986. 日本最初の洋式捕鯨—山口藩の北海道漁場進出. くじら、No.1、p.5.

矢代嘉春、1976. 鯨史の谷間—銃火器、ノルウェー式併用時代. くろしお文化、6号、22—30.  
矢代嘉春、1983. 日本捕鯨文化史. 新人物往来社、東京、804p.



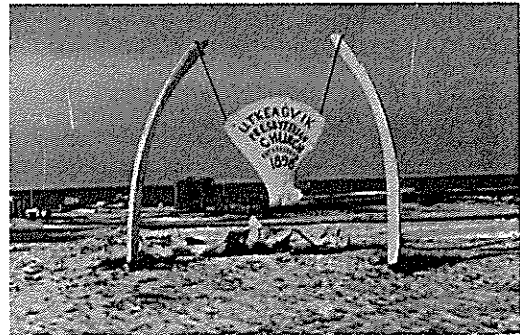
① バロー村エスキモー捕鯨組使用のポンプガンとポンプランス。



② 小銃が中折元込式であることを示す。



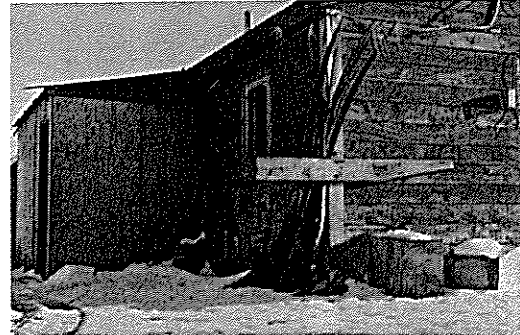
③ 同銃を構える。(エスキモーホエールマン Joe Panigeo 氏)



④ バロー村の有名な風景、“鯨の沢山とれる処”。

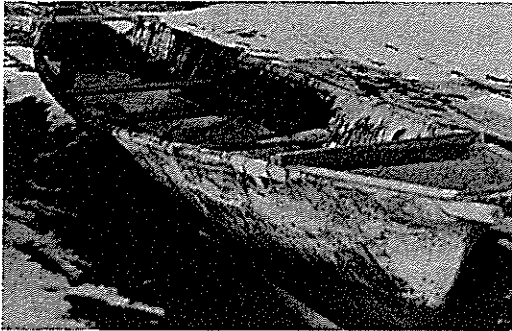


⑤ ダーティングガン。(J. Panigeo 氏宅前にて)

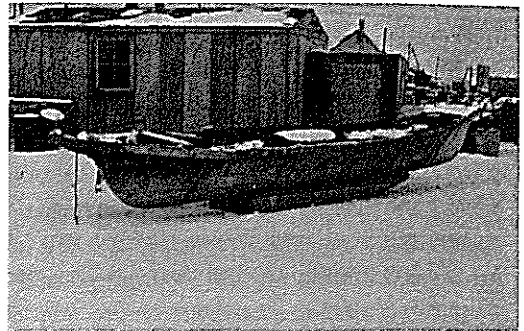


⑥ ボウヘッドの鯨ひげ。現在、この中の3枚が鯨研、鮎川鯨博物館、遠水研粕谷俊雄氏にそれぞれ所蔵されている。

図4. Barrow, Alaska (1973年10月)



⑦ ゴマフアザラシ皮製 UMI AK。



⑧ ⑦に同じ。出勤に備え木枠ソリ(スキッド)に乗せてある。

図 4 (続き) Barrow, Alaska (1973年10月)

## 続・続 コマッコウ

鯨類研究所 大村 秀雄

1984年12月号(第358号)にコマッコウを、1986年1月号(第361号)に続・コマッコウを書いたが、今度又若干の資料が得られたので、ここに、続・続コマッコウとして報告する次第である。

事の起りはスイス、ベルン大学脳研究所のビレリ教授である。同教授から1985年5月1日附で、1枚の葉書が舞い込んだ。それによると鮮新世(Pliocene)の鯨の研究を行なう上で必要があり、コマッコウ(*Kogia breviceps*)又はオガワコマッコウ(*K. simus*)の歯4~6本が必要である。この研究は1週間もあれば充分で、用事が済めば直ぐ返却するから、日本の誰か貸してくれる人はいないだろうか、というものであった。

鯨研通信第358号に書いたように、私は最近コマッコウに関する論文2篇を発表した。ひとつは英文報告第33号(1981)に高橋さんと共著で書いた茨城県東海村に漂着したもの、他は英文報告第35号(1984)に、白木原さんと伊藤さんと共著で書いた北太平洋の真ん中で、大目流しで捕獲されたもので、これは海洋水産資源開発センターの御好意で入手したものである。共にコマッコウ(*K. breviceps*)である。但し両者とも極めて若く、歯は極めて小さかった。しかも東海村のものは死後波間に漂っていて、頭が岸壁に衝突した為か、歯の先が少し欠けたものが多かった。ただこの標本は、高橋さんが態々現地に赴いて、頭だけ切り取

って、それをルック・サックに詰めて、担いで持ち帰った貴重品である。

これらの歯は小さくてもコマッコウの歯である。その特徴がよく出ている。彼がこれでOKと言うかどうかはわからないが、とに角送ってみようと5月27日附で、これら2頭の歯全部を送った。約1カ月後に御用済となって、返却されて来た。御役に立ったとみえて、鄭重な御礼状と共に返ってきた。

それから暫くたった8月中旬のある日のこと、私は自分の机の引き出しを整理していたら、偶然にもコマッコウの歯、それも成体の大きな歯1本が出て来た。大きさからみて、*K. breviceps*のものであることに間違いない。この歯は大分前に水江さんから貰ったものである。水江さんが九州のある事業場で入手したものであるが、その鯨の体長・性別等一切不明であった。私はこのいきさつを書いて、追っかけてこの歯1本をビレリに寄贈した。

それから1年と少し経った昨年(1986年)11月下旬に、ビレリから3冊の報文が送られて来た。このうちの2冊は、彼が刊行している INVESTIGATIONS ON CETACEA の18号と19号であった。そしてこの18号に、彼のコマッコウに関する論文が掲っていたのである。題名は Pygmy Sperm Whales (*Kogia*) in The Italian Pliocene (鮮新世イタリアにおけるコマッコウ)である。ここで使った標本は、フロレンス

大学考古博物館のもので、この中に鯨のいわゆる耳の骨 (Periotic) が多数蒐集されていて、彼はその中から3個のコマッコウの骨 (Periotic) を発見したのであった。この時まで、第三紀のコマッコウは、まだヨーロッパでは発見されていなかったから、これは彼にとっては大発見であった。この時に役に立ったのが粕谷さんの論文 (1973) であった。この論文に関しては、歯の標本について問い合わせのあった少し前に、彼からこの論文の別刷について問い合わせがあった。粕谷さんに聞けば別刷があったかも知れないが、大した事ではないと軽く考えて、鯨研でコビイを取って送っただけで、粕谷さんには連絡しなかった。

今になって考えると、彼はフロレンス大学の蒐集品の中に、多数の耳の骨 (Periotic) のあることを知り、粕谷さんの論文を頼りに、その種類を調べていて、その中にコマッコウ、オガワコマッコウ各1頭分を発見し、さらに歯も何本かが保管されているのを知って、現在のコマッコウの歯捜しとなったものと思われる。ここで重要な役割を演じた粕谷さんの論文は、どなたも御存じの筈であるが、念のため次に掲げておこう。

Kasuya, T. 1973. Systematic Consideration of Recent Toothed Whales based on the Morphology of Tympano-periotic Bone. *Sci. Rep. Whales Res. Inst.* 25: 1—103.

このいわゆる耳の骨は非常に硬い骨で、しかも他の骨と異なって、鯨の成長に伴って、成長することは殆んどない。そのままの形と大きさを保っている。よく海底から網にかかって拾い上げられる。太平洋の深海底から、もう既に絶滅してしまったサメの歯と一緒に、ヒゲ鯨の耳の骨が採集されたことがある。

ビレリによれば、今まで報告されているコマッコウ (Subfamily KOGIINAE GILL, 1871) の化石として発見されたものは次の通りである。

1. *Kogia prisca*. これは日本から報告されたものである (MATSUMOTO, 1927)。鮮新世。
2. *Praekogia cedroensis*. Baja California から報告されたもの (Barnes, 1973)。中新世—鮮新世。
3. *Kogia floridana*. Florida, USA から報告されたもの (Kellogg, 1929)。鮮新世。
4. これが今回ビレリが報告したもので、コマッコウとオガワコマッコウの2種で、学名は前者が *Kogia cf. breviceps* (BLAINVILLE, 1838)。後者が *Kogia cf. simus* (Owen, 1866) としている。

ここで私が驚いたのは *Kogia prisca* である。これは東北大学の松本さんの報告されたものであるが、*Kogia* の化石の報告では世界最初のものである。水戸市から出土したものであるが、この標本は歯の破片6個で、これを継なぎあわせれば図1の通り3本の歯となる。コマッコウとしては誠に大きな歯であり、その長さは、小さなものでも50ミリ、大きなものでは90ミリにも達する。現存種の歯の長さは、鯨研通信361号に書いた通り、コマッコウで40ミリまで、オガワコマッコウでは30ミリ以下である。

それにしても、日本からこのような報告が出ていることは、ビレリに教えて貰うまで全然知らなかった。小川鼎三先生も東北大学におられて、しかもコマッコウについて非常に興味をお持ちであり、ワシントンやロンドンにお出かけの時も、その地の博物館でコマッコウを調べておられるが、それはこれより約10年後のことで、この論文の発表された1927年には、鮎川へ初の鯨見物に出かけておられる (中央公論社刊「鯨の話」より)。先生もこのコマッコウは御存じでなかったように思う。この論文は次の通りである。

Matsumoto, H. 1927. On some fossil cetaceans of Japan. *Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ. Sendai Japan*. 2nd Ser (Geology), Vol. 10: 17—27.

なおビレリの今回の *Kogia* の研究に協力して、材料を提供したのは、私の外に、南アフリカ、ヒュームウッドのポート・エリザベス博物館・副館長グラハム・J・ロス博士がいる。彼はオガワコマッコウの歯ばかりでなく、耳の骨 Periotica も提供している。このロス博士は、最近日本の古式捕鯨の絵を入手したが、

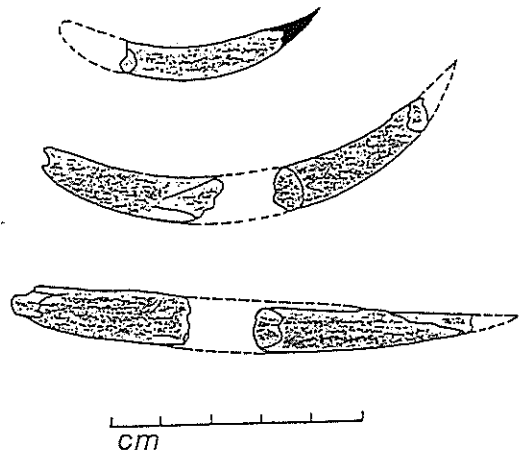


図1. *Kogia prisca*  
(MATSUMOTO, 1927による)



よくわからないから、その説明をして欲しいと、私の所へそのスライドを送って来た。見ると山口県川尻（現在の油谷町）のものである。私は同地にお伺いして、いろいろのことを教えて貰って、それをロスに連絡した。そんな関係で私は、その後下関市に設立された西日本鯨研究会の顧問に推薦されたりした。鯨の世界も、広いようで狭いものである。

なお私の記憶に誤りがなければ、日本にも歯クジラ類の、いわゆる耳の骨 (tympano-periotic bone, 但しビレリは Periotic としているから本文の中では、これに従った) の化石が集められている。このような化石を素人が拾い上げても、その正体はわからない。誰かに鑑定を依頼する。このようにして自然発生的に集められたものようである。

もし現存している場合は、どなたかにその研究をお願いしたいものである。或いは意外な大発見があるかも知れない。

ところでこの *Kogia prisca* であるが、その後ビレリから手紙が来て、この標本を見たいから、この標本を保管している研究所にこの手紙を廻してくれないかという依頼があった。この報告は戦前の東北帝国大学研究報告に出ているから (1927年)、現在の東北大学に連絡すればよい。ただ理学部であるが、そこには

私の知っている人はいない。そこで水産学科の谷口旭先生に事情を説明して依頼した。谷口先生からは直ぐ返事があって、理学部の友人に依頼したこと、ただし大分古いことであり、教室そのものも移転しているから、少し時間がかかるかもしれないとのことであった。

それから約 1 週間後に、理学部地質学古生物学教室の石崎国照さんより手紙があり、標本は確かに保管していること、この中に一本 (図 1 の最上段のもの) を貸し出してもよいとの手紙を戴いたのである。

私はいささか驚いた。このような場合の返事は、何分にも古いことであり、鋭意捜しましたが見つかりませんというのが普通のように思う。この時感じたことは、東北帝国大学未だ健在なり、ということであった。

早速ビレリに連絡し、彼には鯨研を通して貸し出した。そこで私もこの標本を直接見る機会に恵まれたのであるが、どうもこの歯は *Kogia* の歯ではないように思われる。但し、これは委細ビレリに任せておかなければならない。最後にこの標本を巡って多くの方々の御努力があったものと思う。上記の谷口さん、石崎さん、その他東北大学の関係者の御努力に対して、ここに厚く感謝の意を表します。

## ストランディング・レコード - 5

| 番号  | 日付         | 種類    | 頭数 | 場所             | 報告者            | 備考        |
|-----|------------|-------|----|----------------|----------------|-----------|
| 0-7 | 03/03/1987 | インイルカ | 1  | 北海道乙部町<br>滝瀬海岸 | 中沢 幸男<br>安川 哲夫 | 体長127cm、雌 |

◎上記の情報は、北大・河村章人氏のもとに寄せられ、鯨体調査の上、頭骨が採取されました。(吉岡)

## ぶ っ く す

1. Birnie, P. (ed.), 1985. International Regulation of Whaling: From Conservation of Whaling to Conservation of Whales and Regulation of Whale-Watching. Oceana Publications, Inc., New York. Vol. 1, xliii+574pp. Vol. 2, xi+575-1053pp.
2. Bockstoce, J.R., 1986. Whales, Ice, and Men: The History of Whaling in the Western Arctic. Univ. of Washington Press, Seattle and London. 400pp.
3. Bryden, M. M. and R. Harrison (eds), 1986. Research on dolphins. Clarendon Press, Oxford. xiv+478pp.
4. Donovan, G. P. (ed), 1986. Behaviour of Whales in Relation to Management. International Whaling Commission, Cambridge, U.K. 282pp.
5. Kinne, O. (ed.), 1985. Diseases of Marine Animals. Vol. IV, part 2. Introduction, Reptilia, Aves, Mammalia. Biologische Anstalt Helgoland, Hamburg. xiii+884pp.